

THEY+TIMES

YOKOO TADANORI MUSEUM OF CONTEMPORARY ART NEWSLETTER

横尾忠則現代美術館ニュース

27



SPECIAL REPORT

横尾忠則の恐怖の館
2021.9.18(土)－2022.2.27(日)

女優アニタ・エクバグをかたどった立体作品《交叉の泉（部分）》



廃墟化した展示室

本展は「美術館」を「お化け屋敷」に変身させることで、横尾芸術における「恐怖」の問題について考察する試みでした。「美術館コスプレ」ともいうべき方法論は、美術館が温泉に変貌した「ようこそ！横尾温泉郷」（2016年）や、病院になった「兵庫県立横尾救急病院展」（2020年）などでもお馴染みの、いわば当館のお家芸といえるかもしれません。

本展は「江戸川乱歩全集」（講談社、1969年）の挿絵20点から構成された「乱歩迷宮」からスタートします。書籍サイズの挿絵を、等身大以上に拡大出力したものが、迷宮内に次々と現れます。いわばディスプレイの一部なのですが、本来これらの挿絵は「印刷」して初めて完成形となるものです。また横尾さんの緻密な挿絵が拡大出力に充分耐えることは、「幻花幻想幻画譚」展（2015年）で実証済みでした。

不気味な挿絵をさらに引き立てたのが「照明」と「音」でした。本展の場合、暗闇を手探りで進むような不安感が不可欠です。最初は、高知県香南市赤岡町の「絵金祭り」のように、ロウソクの灯りだけで挿絵を照らし出そうと考えていました。もちろん展示室で火を燃やすわけにはいかず、LEDなのですが、いくら何でも暗すぎました。そこで挿絵はスポットライトで照らし（色彩が認識できる限界まで照度を落とす）、LEDロウソクは雰囲気を出す小道具として用いました。当初は日時限定で、お化けに扮した役者さんが迷宮内に出没するイベントを考えていました。ところが、ピッコロシアター（兵庫県立尼崎青少年創造劇場）の劇団部に相談したところ、演技経験や衣装調達、安全確保などの問題が山積みで、実現が難しいことが分かりました。実際「乱歩

迷宮」は、ただでさえ恐怖感をおおる出来栄になったので、これ以上はやり過ぎになってしまったでしょう。そのかわり、ピッコロ劇団の3人の俳優さん（野秋裕香さん、今井佐知子さん、三坂賢二郎さん）にご協力いただき、乱歩の小説のイメージで「悲鳴」「高笑い」「うめき声」を録音しました。特定のポイントに差し掛かると、これらの「声」とともに、突如作品が照らし出されます。迫真の演技に、腰を抜かした方もおられたかもしれません。

「闇について」のコーナーでは、展示室全体を廃墟化する試みを行いました。はるか昔に忘れ去られた美術館があったと仮定して、その禁断の扉を開けたら、果たしてどんな光景が広がっているだろう？ そんなことをイメージしました。薄汚れて染みが浮き出した壁面は、ディスプレイを担当したスーパー・ファクトリーのスタッフ渾身の力作です（エレベーター内の血飛沫も同じ方によるものです）。床には古びた照明器具やイーゼル、木箱などのガラクタが散乱していますが、これらは当館および隣接する原田の森ギャラリーの倉庫から発掘したものです。当館の建物は築約40年、原田の森ギャラリーは約50年経っており、倉庫を漁ると、今なお当時の備品類がいくらか残っていました。なかにはガスマスクとか（ちゃんと近代美術館時代の備品シールが貼られています）、一体何に使うつもりだったのだろう？ と悩むようなものもありました。

「美術館コスプレ」シリーズは、スタッフにとっても悪ノリできる楽しさがあるのですが、ぼちぼちネタが尽きてきました。次の展開が楽しみでもあり、頭痛の種でもあるようです。

(YA)



LEDロウソクに照らし出された《風景》シリーズ



展示室の隅に幼年時代の横尾さんのシルエットが



にぎわう展示室

「乱歩迷宮」にも入場待ちの列が

開館待ちの行列

チケットカウンターにも列が

今年度後半は「横尾忠則の恐怖の館」展に連動した内容を、前期と後期に分けて展示しました。「江戸川乱歩全集」と「一人三人全集」コーナーでは、恐怖の館展の乱歩迷宮などに現れた恐怖のイメージが、実は横尾さんが描いた本の挿絵だったことを紹介。原画、色校正紙、刷り出し、完成した本、そして販促のための新聞に掲載された広告デザインやポスターを並べ、制作過程から広報の様子までをご覧くださいました。「週刊 少年マガジン」のコーナーでは、1970年代に横尾さんが表紙の構成を手がけたいくつかの号を展示しました。『あしたのジョー』や『巨人の星』など当時連載中だった作品だけではなく、浮世絵や海外の映画など横尾さんが興味をもった幅広いジャンルから引用されたイメージたちがカラフルに彩色されたり、言葉を書き加えられたりすることで独特の横尾ワールドができあがっていました。「交叉の泉」のコーナーでは、恐怖の館展の会場に妖しく横たわっていたアニタ・エクバグの像が実はローマの観光名所「トレビの泉」の東京版を作ろうとした巨大なプロジェクトの一端だったことを紹介しました。このプロジェクトのために横尾さんが描いた15点のドローイングには、俵屋宗達作品や『海底二万里』の挿絵、地蔵十王像など多彩な要素がちりばめられていて、プランが持つスケールの大きさと複雑さが伝わってくるようでした。コレクションギャラリーでは、このように豊富なアーカイブ資料をもつ当館ならではの内容によって、今後も横尾さんの創造の世界をマニアックに追求していきます。

(ON)

YOKOO TADANORI COLLECTION GALLERY 2021



「交叉の泉」コーナーの展示風景



「江戸川乱歩全集」コーナーの展示風景

横尾さんから数多くの作品をご寄贈いただいたことをきっかけに、今から10年前の2012年11月3日、横尾忠則現代美術館が開館しました。建物は、もとは兵庫県立近代美術館の西館として使われていたもので、ちょうど横尾さんの「画家宣言」と同じ頃、1982年に開館しています。北側の摩摩山麓には、かつて新増時時代の横尾夫妻が暮らしした場所もあり、立地の面でも横尾さんと因縁の深い美術館といえます。開館以来、年平均3本の展覧会を開催、横尾忠則の彫の館^①で27本目と開館しています。さほど大きな美術館ではないので、企画、常設の区別は設けず、収蔵品をベースにしつつ企画性をもたせることで、様々な切り口から横尾芸術を紹介してきました。同じアーティストの作品なのに、単独にならないより四苦八苦した経緯10年間でもあったのですが、その甲斐あってか、毎回好評と空間が変わるのが面白い、との声もいただきます。しかし何よりも、横尾さんの途方もない作品の量と、まるで同一人物が創ったとは思えない豊かなバリエーションあればこそ、これだけ変化に富んだ展覧会が実現できたのだと思います。

(YA)



鮮やかな赤と黄に変更され、背景の青色とのビッドな対比を生み出しています。(HY) ❶横尾忠則展 カウト&ペースト 切った貼った大立反り これまでの横尾さんの創作活動のなかから、1980年代末から1990年代前半にかけての、イメージを切り貼るコラージュ性が突出し、造形的な実験が前面に押し出された時期に注目した展覧会です。ポスターは、レイアウトのバランスをあれこれ試す、途中の瞬間を捉えて固定したものです。完成しているようにも、未完成のようにも見える曖昧な表情が魅力的です。(YA) ❷横尾忠則 続・Y字路 4月に着任して作明の5月初旬から展覧会準備に取りかかり、よく分かっていない展示空間とシステムに翻弄されながら8月開幕と1回遅れのスケジュールです。「黒いY字路」シリーズは画面が光ってよい照明が観覧したため、画面を照らすのをやめ、コンクリートの床から反射した光でぼんやり見せるという大胆な手段をとりました。目が慣れるまでは黒い壁に光りええな空間で、オープニングの日、横尾さんに怒られながらキンクしていました。(HM) ❸横尾忠則 幻花幻想画展 横尾さんのイラストレーションの傑作「幻花」(瀬戸内寂庵蔵)挿絵版画(1974-75年)全371点を一堂に会した展覧会。モノクロの図柄に赤の題字が映えるシタデザインで異彩を放っています。じつはこのポスター、横尾さんからのかなたなデザインを頂戴せず、本来なら展覧会開幕日の1-2か月前には完成しているはずが、刷り上がったのはなんと前代未聞の4日前。横尾さんの展覧会は毎度スリル満点…!(HY) ❹横尾忠則展 わたしのポップと戦争 あえて終戦70周年から1年ずらすて、常に問み続けなければならない問題として「戦争」ととりあげました。世代的に出征を免れましたが、横尾さんにも幼少期の戦争の記憶をしばしば作品化しています。シリアスな問題を正面から取り上げるといっても、横尾さんの私的な体験を通じたものとして、また「POP & WAR」という語感や、ビジュアル的な文字の強さから発想された部分の大きい展覧会だといえるでしょう。(YA) ❺ヨコ・マニリスム vol.1 膨大なアーカイブ資料に接するなかで発見した面白いものをお撮り分けるつもりで企画した展覧会。作品として登録された情報公開のために採寸が必要だったり、実は準備が大変なのです。当館での初企画がこれだったため、横尾さんにマニッシュな学芸員という印象をもたれてしまったようですが、学芸員って皆どこかマニッシュな気がします。(HM) ❻ようこそ!横尾温泉郷 銭湯と温泉をテーマにした作品を紹介。美術館を温泉施設に見立て、展示室には湯涌き槽を、1Fには卓球場を設置しました。「温泉と言えばフットボール」という横尾さんからのうち2台で、店先でよく見かけるソフトクリーム看板を館内各所に配置。撮影スポットとしても人気を博しました。リクエストは、現在横尾さん宅のフロアマップとして活躍しています。(HY) ❷ヨコ・ワールド・ツアー 精魂尽き果た

「マニエリスム展」開幕から5ヶ月で閉幕という強行スケジュールにも関わらず、いろいろ詰め込みすぎて倒れそうになりました。アトリで発見した50年前の写真のヨーロッパ旅行のライドをデータ化したり、横尾さんのレコードコレクション2000枚を調査したり、膨大な旅行写真と事実を照合したりと汲みにはまりながら、ワールドツアーといえどツアーTシャツが欲しいとか、カタログは旅行コードっぽくとか手を広げ、個人的には「マニエリスム vol.2」でした。(HM)

●**横尾忠則 HANGA JUNGLE** 町田市立国際版画美術館からの巡回展で、計200点以上の版画をすべて展示するとのこと、いわば横尾さんの版画展の決定版でした。町田よりはるかに狭い当館では、作品を2段がけ、3段がけとギョウギウギ詰めにするしかなく、ある意味「ジャングル風」満載となりました。そして会場には、ターザンの雄叫びが絶続的に響き渡っていたのでした（？と聞かされる監視員さんにとっては、いい迷惑だったかもしれません）。(YA)

●**横尾忠則の異土旅行** 横尾作品における「死後の世界」の表現に着目した展覧会。新作絵画「愛の洞窟」を全面に使用したポスターは、英語の題字を大きく取り、往年の洋装ポスターのよき雰囲気を上手に受けています。印象的なのは女性の目に空いた黒い穴。割れたガラスや女性を抱きかかえる男性の仕草などが「異土旅行」というタイトルとあいまって、某雑誌会社から「死のイメージと直結する」として出品許可が下りなかったという口ぐせ。(HY)

●**横尾忠則 画家の肖像** ポスターの自画像とはとても小さいのですが、会場には150号サイズの自画像が最新作として出品された話題になりました。大きな作品はよく描かなくてと言われて久しかったので、嬉しいサプライズに赤い壁を立ててお迎え。ところが、「会期中途中でニューヨークの展覧会に出品するから送ってほしい」と言われ、頭が真っ白に……。結局、最終日に梱包して撤出しました。ちなみにこの作品が「自我自掘展」のポスターになっています。(HM)

●**横尾忠則 在庫一掃大放出展** かねて横尾さんから「いっぺんコレクション（企画）」やられてと言われていたのに、案を待っていたら時間切れに。「どうしよう」「うーん、なんか適当にやってもいい」という訳で急遽仕立てた展覧会です。まだ当館で展示したことのない作品を集めて、展覧会を在庫処分セール会場に見立て、のびを立ったら、監視員さんにハッピンを着てもらったり、チンドン屋さんのイベントやミニ、ヤケクンスが意外に楽しかったです。(YA)

●**横尾忠則 大公開制作劇場 ～本日、美術館で事件が起こり～** 画家転向後の1980年代から横尾さんが公開制作で描いてきた作品を、映像・写真などの記録資料とともに辿りました。展覧会初日には当館で約5年半ぶりとなる公開制作が行われました。ポスターの中には2008年に自身を版画美術館で行われたPCPPP（Public Costume Play Performance Painting）で、着席のこすみに身を包んだ横尾さんの姿が見えます。(HY)

●**人食いイザナと金髪美女－笑う横尾忠則展** 横尾流ブラックユーモアをテーマにした企画立案と同様に、主役には

ならこの作品と決めてのうえて(Panic ばかりにつくパニック)。展覧会名もこの作品からの着想ですが、元ネタは「ミシンと蝙蝠傘の、解剖台のうえての偶然の出会い」(ロートアモン(俗「マルトロロ」の歌)より)。会場では展覧会が手がけたスーパー狂言の装束や道具箱と絵の出会いを演出、随所に小ネタを挟み、実は担当者が一番楽しんでたかもしれません。(HM) ㊤**横尾忠則 自我自撰展** **ゲスト・キュレーター:横尾忠則** 企画者(ゲスト・キュレーター)=横尾さん曰く、「(展覧会のコンセプトは?)コンセプトがないのがコンセプトです!」「(作品を選んだ理由は?)気分です」…もしばくが同じことを言ったら、確実に館長に殺されるでしょう。なお、この展示した「滝のインスタレーション」は、約1万枚の滝のポスターを空間全体に貼り巡らせるもので、準備に数ヶ月かかりましたが、それはもう圧巻でした。(YA) ㊤**兵庫県立横尾救急病院展** 横尾さんの創作活動と「肉体」との関係に焦点を当てた展覧会。美術館にベッドや点滴架、待合いすや外来案内板を持ち込み、会場を丸ごと「病院」へと変貌させました。新型コロナウイルスの感染拡大により開幕後1か月で臨時休館を余儀なくされたが、再開後に会場を延長して開催、ポスターに使用された「想い出劇場」には、石と温泉への旅行中に芋茎を食べた横尾さんがアレルギーを起こして救急搬送される様子が描かれています。(HY) ㊤**横尾忠則の體裁まつり** 彫刻や戯作を中心に横尾さん独自の「死」のモチーフを集め、死生観を探ろうという展覧会。作品のみならず、日常に登場する観劇グッズの存在も、彼岸と此岸をめぐる旅を賑やかに演出して見せられています。ところが開幕3週間前に決定、広報ツールはもちろん、カタログ原稿や展示プラン等もほぼ完成していましたが、コロナ禍が拡大する中で、本展の肝である「死」の視察性と向き合うことに迷いか生じているのも事実です。展覧会は白紙に戻りましたが、とどろえず「體裁」という漢字は書けるようになりました。(HM) ㊤**横尾忠則の緊急事態宣言** コロナ禍のため予定を変更し、急遽組み立てた展覧会。横尾さんからTwitterで発信しているマスクアート(With Corona)の作品に思い配りて、まるでウイルスが空間を侵食するかのような展示となりました。また、無観観の展示室で、パブリンダーの草刈民代さんらが踊る映像作品(In between)を制作しました。めちゃくちゃカッコいいので、当館の公式YouTubeチャンネルでご覧ください。(YA) ㊤**Curators in Panic ~横尾忠則展 芸芸急危機~** 横尾さんの大規模個展に主要作品を貸し出してしまい展覧会開催の危機に陥った芸芸員が、選抜メンバーを選んだ作品の中から「推し」を語るという企画。ポスターの原画は2票を獲得した作品ですが、作品名が長すぎるゆえ広範囲画像としては敬遠されるという運命を背負っていた。作品名と切り離された情景が見る人にとっても物語を想像させるのかも楽しそうです。「芸芸員はタコのかい?」「いや男性の方だと思ってる」というやり取りが担当者間で交わされました。(HM) ㊤**横尾忠則の恐怖の館**

EXHIBITIONS

GENKYO 横尾忠則

2021年1月、愛知県美術館で開催した展覧会「GENKYO 横尾忠則 原郷から幻境へ、そして現況は？」が、東京都現代美術館、大分県立美術館を巡回し、2022年1月23日に閉幕しました。横尾さんの活動を振り返るだけでなく、実験的な最新作や、コロナ禍の現状に向き合ったプロジェクト「WITH CORONA」など、進行中の活動もふんだんに取り入れ、現在に繋がる圧倒的なエネルギーを感じさせるものでした。横尾さん史上最大規模の個展となった東京会場での出品数はなんと600点以上！当館からも約190点の作品資料を出品したのですが、貸出・返却の作業はまるで引越しのよう。さらに主役級の作品不在の中での展覧会企画といった難題も発生し、特別な1年になりました。



AICHI 2021.1.15-4.11



TOKYO 2021.7.17-10.17

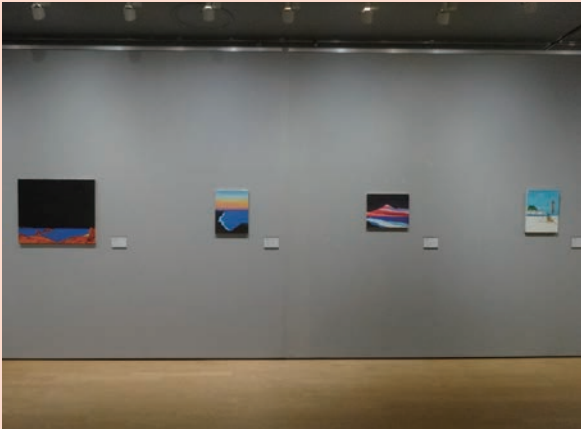


OITA 2021.12.4-2022.1.23

たび・でん | TABI / TRIP / TRAVEL / JOURNEY 2022.1.22 - 7.3 兵庫県立美術館

兵庫県立美術館の「2022年コレクション展 I」のテーマは「旅」。1973年から翌年にかけて制作された横尾さんの風景画「日本原景旅行」シリーズより8点が出品されています。これらは、『芸術生活』連載のため、横尾さんが日本各地を取材して描いたもの。旅に出ることが難しい今だからこそ、30代の横尾さんの目に映った日本の名勝へどうぞ。時間旅行も楽しめます。

(HM)



「GENKYO 横尾忠則 原郷から幻境へ、そして現況は？」展示風景、愛知県美術館、2021年



KOBE 作品貸出作業

横尾作品をめぐる旅

豊島横尾館



豊島横尾館 写真:山本耕

3年に一度、瀬戸内の島々を舞台に開催される「瀬戸内国際芸術祭」は今年5回目を迎えます。作品をおとして島の文化に触れることができるのが魅力のこの芸術祭、回を重ねるごとに見どころが増えています。2013年、瀬戸内海の東部にある豊島にオープンした「豊島横尾館」もそのひとつ。横尾作品に通底する「生と死」をテーマに掲げた絵画とインスタレーションが、古い民家を改修した建物（建築家の永山祐子さん設計）と響きあっています。館の内外に点在する赤い色は生命を感じさせ、絵画を拡張したような庭に流れる川は此岸と彼岸を連想させます。滝の絵葉書のイメージで埋め尽くされた塔も圧巻。生と死が混在したエネルギーに包まれる体験をぜひ。



豊島横尾館
香川県小豆郡土庄町豊島家浦2359
https://benesse-artsite.jp



瀬戸内国際芸術祭2022
https://setouchi-artfest.jp

せ、絵画を拡張したような庭に流れる川は此岸と彼岸を連想させます。滝の絵葉書のイメージで埋め尽くされた塔も圧巻。生と死が混在したエネルギーに包まれる体験をぜひ。

寂聴さん最後の手紙

『往復書簡 老親友のナイショ文』の続編が朝日新聞出版から出版されました。その名も『寂聴さん最後の手紙 往復書簡 老親友のナイショ文』で、瀬戸内寂聴さんがご逝去されるまでの横尾さんとの往復書簡が収録されています。半世紀にわたって交流のあったお二人は最後にどんな言葉を交わされたのでしょうか。

※瀬戸内寂聴さんは2021年11月9日に逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



『月刊 神戸っ子』2021年6月号（服部プロセス株式会社 神戸っ子出版事業部）

月刊『神戸っ子』好評連載中

2020年2月号より月刊『神戸っ子』に連載中の「神戸で始まって 神戸で終る」は、神戸との関わりに特化した横尾さんの自伝です。連載第17回（2021年6月号）からは、いよいよ当館のエピソードに突入。順を追って企画展が紹介されていて、スタッフは次は自分が登場するのではないかとヤキモキしています。このペースだと、いつか現実時間に追いついてしまうのですが、そこで連載が完結するのでしょうか？まさか物語が現実を追い越したりして…？

(YA)



「原郷の森」完結

『文学界』（文藝春秋）2019年8月号から連載が始まった横尾さんの小説「原郷の森」がついに完結し、3月に単行本として出版されました。画家やアーティストなど芸術界のみならず、文学界や映画界などから入れ替わり立ち替わり現れる偉大な先人たちは、はては宇宙人までが横尾さんのエーテル体Yとともにとどなく語り合うその様は、一度迷い込むと抜け出すことができない豊かな創造の森のようです。

(ON)



『寂聴さん最後の手紙 往復書簡 老親友のナイショ文』（朝日新聞出版）

「シン・老人のナイショ話」連載開始

『週刊朝日』誌上にて瀬戸内寂聴さんと横尾さんとの間で交わされていた往復書簡「老親友のナイショ文」は、瀬戸内さんのご逝去により、横尾さんからの最後のお手紙が掲載された第113回が最終回となりました。そして新たな連載として、横尾さんの今を横尾さん自身が語る「シン・老人のナイショ話」が始まりました。

(ON)

YOKOO TODAY

ART/MUSIC わたしたちの創作は音楽とともにある 2021.12.4 – 2022.4.10 世田谷美術館

世田谷美術館の収蔵品を紹介する「ミュージアム コレクション III」に横尾さんの作品が出品されました。「ART/MUSIC わたしたちの創作は音楽とともにある」というタイトルのこの企画には、ジャン＝ミシェル・バスキア、アンリ・ルソー、ロバート・ラウシェンバーグなど、音楽と深い関わりをもつアーティストが勢ぞろい。横尾さんの作品は「聖シャンバラ」シリーズ、音楽家の細野晴臣さんとのインド旅行から生まれたアルバム「COCHIN MOON」のほか、精神世界への関心が高まった1970年代のものが中心。サンタナやマイルス・デイヴィスなど、あのレコードジャケットは横尾さんのデザインだったのか、と驚いた方もいるのではないのでしょうか。

(HM)



世田谷美術館、撮影:上野明広

Preview

Forward to the Past 横尾忠則 寒山拾得への道
2022年4月9日（土）－7月18日（月・祝）

Forward to the Past: Yokoo Tadanori's Road to Hanshan and Shide

2022年4月9日（土）－7月18日（月・祝）

横尾忠則現代美術館 Y+T MOCA

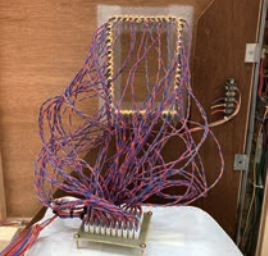
寒山拾得への道

Forward to the Past

横尾忠則が取り組む新たなテーマは寒山拾得図。中国は唐の時代の僧だった寒山と拾得は、奇妙な風貌と奇行で知られていますが、実は文殊菩薩と普賢菩薩の化身だったという言い伝えから、これまでも数々の文学や美術に取り上げられてきました。この浮世離れた、しかしどこか気になって仕方がない詩人と掃除夫の姿を横尾は自らが「朦朧体」と呼ぶ新たな技法で描きます。近年患っている難聴と腱鞘炎がもたらした身体的な感覚の変化は、自由にうねる線や輪郭のゆらぎ、軽やかな色使いとなって作品に現れました。画業40年にして横尾が獲得したこの新たなスタイル。でも実は、過去の作品にいくつもの共通点を見出すことができます・・・

本展では、最新作を一堂に展示するとともに、過去の作品をあわせて参照することで、横尾の現在が思いがけなくもこれまでの格闘と模索の成果と巡り合っているのではないかということを考察します。“Forward to the Past”、つまり「過去へ前進」する最新の横尾忠則をぜひご覧ください。（ON）

美術館の活動紹介



上 | 《Guardian Angel》修復作業
下 | LED 電球の点灯テスト（裏面）

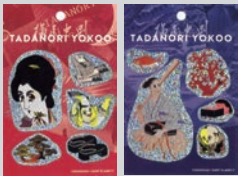
作品・資料の保存と活用
— 光る絵画の修復 —

《Guardian Angel》(1983年)は電飾が施されたピカピカと光る絵画作品です。しかし当初の電球は点かなくなり、新品の入手も困難でした。一度「在庫一掃大放展」(2018年)に出品する際、LED電球に交換しましたが、うまく点灯しませんでした。そこで「寒山拾得展」(2022年)への出品を機に配線や制御盤から見直し、本格的な修理を行いました。白熱電球とLED電球では色味が異なるので、電球の表面を塗装し、見た目を変化しないよう配慮しました。今日の修復では、なるべくオリジナルを守る“現状維持”という考え方が原則ですが、電気製品や寿命の短い素材が使われる現代美術ではそう言ってもいられません。作品ごとのオリジナル性をどうやって守っていくのかを考えることが修復作業の初めの一歩になります。（MR）

レンズフィルムシール（左:夜間飛行、右:ソレイユ）



煌々シール（左:麗人、右:龍宮）



MUSEUM SHOP

ミュージアムショップのオススメ商品をご紹介します。新たに2つのシールが入荷しました。レンズフィルムシールには、イベット・ジローのポスターやヨーロッパ観光ポスター集、「おわりの美学」の挿絵など、横尾さんが1960年代に制作したポスターや装丁・挿絵の印象的なイラストレーションたちが登場しています。煌々シールは2000年に制作された作品から。〈龍宮〉はTOKYO DOME CITYのためのポスターが元になっているので、浦島太郎はバットを持ち、サングには野球ボールが潜んでいます。よく見るとひとつだけ泣き笑い人生シリーズの顔になっているのも面白いですね。どのシールも背景が眩しいほどにキラキラと輝いており、気分を上げてくれそうなアイテムです。ぜひ実際にミュージアムショップにてご覧ください。（OS）

兵庫県立美術館 | 展覧会スケジュール

特別展
ミニマル／コンセプチュアル:ドロテ&コンラート・フィッシャーと1960-70年代美術
2022年3月26日（土）－5月29日（日）
関西の80年代（仮称）
2022年6月18日（土）－8月21日（日）
コレクション展
2022年コレクション展I
「た・び・てん」
小企画 生誕100年 元永定正展－伊賀上野から神戸、そしてニューヨークへ－
2022年1月22日（土）－7月3日（日）
※4月11日（月）－4月22日（金）は閉室し一部展示替を行います
※兵庫県立美術館の特別展又はコレクション展の有料チケット半券ご提示で、当館の企画展を団体割引料金でご覧いただけます（詳細はウェブサイトなどでご確認ください）

横尾忠則現代美術館ニュース Vol.27

2022年3月31日発行

編集 平林恵（横尾忠則現代美術館 学芸員）
編集補助 尾崎幸恵（同学芸員補助）
執筆 YA: 山本淳夫（同館長補佐兼学芸課長）
HM: 平林恵
ON: 小野尚子（同学芸員）
OS: 尾崎幸恵
MR: 松永亮太（同学芸員補助）
HY: 林優（兵庫県立美術館 学芸員）
デザイン 相島大地（ヨコオズ・サーカス）
印刷 岡村印刷工業株式会社
発行 横尾忠則現代美術館

Yokoo Tadanori
Museum of
Contemporary Art
Y+T
MOCA
横尾忠則現代美術館



開館時間 10:00-18:00（入場は17:30まで）
休館日 月曜日（祝日の場合は翌平日）／年末年始／メンテナンス休館

〒657-0837 兵庫県神戸市灘区原田通3-8-30
Tel: 078-855-5607（総合案内）／ Fax: 078-806-3888
https://ytmoca.jp
Y+Tメールマガジン登録 https://ytmoca.jp/about/media/

INFORMATION